

<http://home.kobe-u.com/kinki-sha/>

近畿学校保健学会通信

No.145

平成28年10月15日発行
近畿学校保健学会事務局
〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘3-11-1
関西福祉科学大学 大川研究室
TEL&FAX : 072-947-1307
Mail : kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振込口座 00940-5-181826

目 次

第63回近畿学校保健学会（平成28年度年次学会）報告

1. 第63回近畿学校保健学会を終えて 2
2. 一般講演座長報告 2
3. 会長講演報告 7
4. シンポジウム報告 7
5. 平成28年度近畿学校保健学会奨励賞 8
6. 学会印象記 8
平成28年度近畿学校保健学会奨励賞抄録 10
平成28年度近畿学校保健学会評議員会・総会 報告 11
平成28年度第1回近畿学校保健学会幹事会議事録 13
第5回研修セミナー 14
平成28～30年度幹事及び評議員名簿 15
編集後記 16

会費納入と会員勧誘についてのお願い

本学会は会員の皆様の年会費を主な財源として運営しております。平成28年度の会費（3,000円）をまだ納めておられない方は、早急にお振込み下さいますようお願いいたします。

また、会員の皆様には、周囲の方々に本学会への入会をお勧め下さいますようお願い申し上げます。なお、入会案内パンフレットおよび入会申し込み用紙は、ホームページからダウンロード出来ますので、よろしくようお願い申し上げます。

第63回近畿学校保健会（平成28年度年次学会）報告

1. 第63回近畿学校保健学会を終えて

学会長 高野 知行
（滋賀医科大学小児科学講座）

このたび、第63回近畿学校保健学会を、去る6月25日（土）滋賀医科大学において開催させていただきました。おかげさまで、医師、歯科医師、薬剤師、養護教諭をはじめ、日頃学校保健にご尽力いただいております教育関係の方々総勢約130名のご参加をいただき、盛会裏に終えることができました。これもひとえにご協力いただきました皆様のご支援の賜物と心より厚く御礼申し上げます。午後に開催されました発達障害をテーマとしたシンポジウムにつきましては、4名の先生方より熱意あふれる御講演をいただき、当初予定しておりました質問・討論の時間を取ることはできませんでした。このテーマにつきましては学校保健における重要課題ととらえ、今後も引き続き、本学会の中で取り組んでいきたいと思っております。

今後とも、近畿学校保健学会の益々の発展のため、本学会へのご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

2. 一般演題座長報告

第1会場

<養護教諭・保健室>

座長 板持紘子（滋賀医科大学）

1-1 保健室空間の在り方に関する検討—小学生の保健室観と保健室利用状況の関連性—

（八木利津子）

学校に行きにくい児童が保健室なら登校できるということは、保健室には普通教室とは異なる空間があるのではないかということに着目し、保健室登校児の在籍する学校と、保健室登校児のいない学校の比較調査の研究である。調査対象の学校規模の差が大きすぎることで、保健室登校児が11名と0名の差、比較検討するには少し無理があると思われた。保健室空間の視点はとても興味深く保健室登校児の保健室空間に焦点を当てると保健室のあるべき姿の参考になると

考えられる。ただ、保健室登校については学校全体で児童へのかかわりについての共通認識が求められる。

1-2 保健室から校内に発信する健康問題—健康観察、来室状況から—（地海和美 他）

朝の健康観察と保健室への来室状況から「健康相談シート」を作成し、養護教諭のアセスメントを加えて校内連携の必要な児童生徒の健康問題の解決を図ることを目的とした研究である。健康観察も担任の視点、養護教諭ならではの視点を生かし、今回は保健室来室状況と合わせて、校内連携した内容のアセスメントについての報告であった。朝の健康観察を有効に活用することにより子供一人一人が置かれている生活もよくわかり、保健室来室と合わせることで問題の早期発見に役立つとの報告である。今後は校内連携について具体的に、方法、担任の役割、

養護教諭の役割などの実践報告に期待する。

1-3 男性養護教諭に関する調査—小学生の調査より— (大川尚子 他)

女性養護教諭の多い中、男性養護教諭が少しずつではあるが採用されている現状から、子供たちは男性養護教諭にどんなことを求めているかについて小学生対象の調査である。男性養護教諭を経験した児童とそうでない児童とでは調査結果に差があると思われる。養護教諭という専門職において女性と男性の両方が在籍している学校では女性養護教諭だけの学校より、男性女生の両方の養護教諭を望んでいるが優位に高い結果であった。男性養護教諭の特性を發揮した執務とは何か、具体的に検討を重ねてほしい。引き続きの研究に期待する。

1-4 男性養護教諭に対する管理職の意識調査 (星 雅博 他)

学校管理職としての校長・教頭を対象に男性養護教諭の認識についての調査結果である。徐々にではあるが増えつつある男性養護教諭。採用については「賛成 40%」「反対 13%」「どちらでもない 47%」とあった。危惧は女子児童生徒への対応のこと。一方男性養護教諭の必要性を感じるは 18%で「男子への性に関する指導、搬送、生徒指導」であった。校種によって男性養護教諭の必要度は異なると思われる。採用については、性別ではなく養護教諭としての資質を重視しているとの回答が多いことは、養護教諭としての専門性評価されていると考える。男性養護教諭としての特性が求められるのではなかろうか。今後の活動に期待する。

<睡眠と生活習慣>

座長 西岡伸紀 (兵庫教育大学)

1-5 幼児における睡眠と生理指標及び唾液バイオマーカーとの関連性 (涂 静怡 他)

幼児の日中活動量が睡眠に及ぼす影響について検討するため、2~4歳の男女15名を対象に、活動量計により歩数・活動量を、シート型体動計により睡眠中の心拍数、呼吸数、体動を、睡眠の

質として唾液中のコルチゾールとDHEAを測定した。また、幼児の睡眠習慣、生活習慣、子育てについて質問紙調査を行った。その結果、日中の活動量が多い幼児では、起床前に心拍数が増加する傾向、及び起床時DHEA濃度が高い傾向が認められた。先行研究を参照すると、日中の活動量の確保が睡眠の質を高める可能性が示唆された。

1-6 健康的生活習慣の自主的形成に関する中学生の意識・態度 (近田 茜 他)

健康的生活習慣に対する意識や態度を明らかにするため、中学3年生6人を対象として、健康的生活習慣について、①特に意識している習慣、②習慣形成のきっかけ等、③習慣の効果、④習慣の阻害要因をFGIにより尋ね、KJ法により整理した。その結果、①特に意識しているのは食事、睡眠、運動、②きっかけ等は常識、習慣、本やテレビ等、③効果は健康的な体、成長、集中状態、④阻害要因としては面倒、疲れ等が挙げられた。また、回答全体は、促進要因として事前知識、及び習慣形成による理想像や効果、阻害要因として欲求や怠惰に整理された。

1-7 中学生の睡眠問題の実態とその関連要因の検討 (藤原 寛 他)

中学生の睡眠問題と生活習慣との関連性を検討するため、544名を対象に、睡眠状況として「朝、起きられない」「寝つきが悪い」「夜中に目が覚めやすい」「授業中の居眠り」を、生活習慣として就床・起床時刻、朝食摂取、身体活動、学習、電子メディア利用時間等を調べた。その結果、男子では学年とともに睡眠問題の「あり群」が有意に多くなる傾向があり、睡眠と有意な関連因子としては、性、学校での眠気感、朝食摂取状況、始業前、昼休み、放課後の身体活動、通塾、及び携帯・スマホ利用、ゲーム利用、TV・Video視聴・PC利用の各時間であった。

1-8 体組成と生活習慣との関連—小学生高学年における横断調査より— (中村晴信 他)

二重エネルギーエックス線吸収測定法による

体組成と生活習慣との関連性を明らかにするため、5, 6年生計237名を対象に、就寝、起床、身体活動等の生活習慣、ダイエット経験を調べた。その結果、男子では、外遊びの時間、運動クラブ加入、ダイエット経験と体脂肪率との間、ダイエット経験と骨量、筋肉量との間、女子では、運動クラブ加入、ダイエット経験と体脂肪率との間、運動クラブ加入、就寝時刻、睡眠時間と筋肉量との間、ダイエット経験と骨量との間に有意な関連が見られた。身体活動や生活リズム、ダイエット経験と体組成との間に関連性が認められた。

第2会場

<ライフスキル>

座長 中村晴信(神戸大学)

2-1 小学校高学年の意思決定に関する自由記述および FGI 調査～意思決定の具体的場面、プロセスについて～(古橋祐一 他)

小学生5年生および6年生の児童を対象に、意思決定の具体的な場面やプロセスの実態把握を目的とした研究である。意思決定内容場面、相談による意思決定の場面、意思決定の成功事例とプロセスに分けて調査し、その結果、性差は顕著ではなかったが、各調査項目において学年差が見られた。本研究は、学年進行に伴う意思決定の違いをとらえており、意思決定を育む内容を含んだ教育内容およびその教材作成に対して貴重な資料を提供した意義深い研究である。

2-2 中学生の定期テスト及び体調管理に関する目標設定スキルの活用(山本千津子 他)

中学生を対象に定期テストや体調管理に関する目標設定スキルの活用について検討した研究である。今回は、テスト前、テスト直後、テスト1か月後に調査を実施し、テスト直後あるいは1か月後に目標設定スキルが高い傾向がみられた。今回はテストが目標設定の対象であったため、目標設定スキルの活用が有用であることが示されたが、今後は様々な学校行事においても、目標設定スキルの活用の促進、およびその効果についても検討されることが期待される。

2-3 中学生の携帯電話によるインターネット利用と学校生活スキルとの関連性について

(藤本功樹 他)

中学生を対象に携帯電話によるインターネット利用と学校生活スキルとの関連性について検討した研究である。その結果、携帯電話の所有、インターネットの長時間利用、フィルタリングサービスの未利用などは、学校生活スキルの低さと関係性がみられた。インターネット利用は携帯から利用可能となることで、中学生の生活に正負両面の影響を及ぼしている。本研究は、その実態を示すとともに、今後のインターネット利用に関する示唆を与える重要な研究と言える。

2-4 小学生用目標設定スキル尺度作成のための基礎的研究—目標設定に関する記述調査および FGI の結果—(筆野元 他)

小学生を対象に日常生活における目標設定の実態について調査した研究である。本研究では、夏休みの目標や、課題における目標設定の適切性等について調査し、その結果、自身の目標設定は、目標設定や達成の確認について抽象的な表現が多く、綿密性にも問題があった。一方、他者の目標に対しては、具体的且つ的確な指摘ができていた。本研究結果は、今後の目標設定スキル尺度作成のための貴重な基礎資料であり、また、他者評価も観点に加えることが有用であることも示された。

<スポーツ>

座長 後和美朝(大阪国際大学)

2-5 スポーツ外傷・障害の予防活動による高校生の行動、意識等の変化(山本順子 他)

本研究では高校生を対象にスポーツ外傷・傷害の予防やケアに対する講習会の実施と、その後の予防活動に対する行動や意識等の変化を縦断的に検討された。講習5ヶ月であっても予防やケアにおける行動や意識は良い傾向を維持していたが、実技講習が行われなかった「温冷交代処置」や「筋力強化」では実施率が低かったことから、講習プログラムの課題として実技講習を

加える等の提案がなされ、今後は改善された講習プログラム後の意識や行動の変化についての報告を期待したい。

2-6 中学生バスケットボール選手に対するセルフチェック普及への取り組み（松尾浩希 他）

本研究ではスポーツ傷害の予防等に対するセルフチェックシートを作成し、中学生バスケットボール選手に対してセルフチェックに関する実技講習会を行うとともに運動の安全意識に対する変化について縦断的に検討された。講習会直後では「医学的知識」に意識向上がみられ、1ヶ月後の講習会内容を報告した文化発表会後では「実技」に関する項目でも意識向上がみられたが、5ヶ月後では意識向上の継続がみられず、今後はスポーツ傷害の予防等に対する意識向上を図る新たな取り組みについての検討を期待したい。

2-7 中学・高校サッカー選手における傷害予防のための取り組み（笠次良爾 他）

本研究では中高一貫校の男子サッカー部員を対象に傷害歴、ケガや疲労への対応の調査とそれらのワークショップ、さらに筋肉の柔軟性のセルフチェック方法に関する実技講習会の実施とケガの予防と競技力向上に関するグループディスカッションを行わせた。高校生ではKJ法により予防mapを完成することができ、中学生では十分な効果が得られていなかったが、今後は中高一貫校の利点を生かした効果的な傷害予防や競技力向上の取り組みについての検討を期待したい。

2-8 女子学生における過去の運動習慣と獲得筋量との関連—市販体組成計を用いた分析から—（間瀬知紀 他）

本研究では女子学生を対象にした過去の運動習慣と獲得筋量との関連を検討され、獲得筋量は中学・高校生時とも運動経験がない者が最も低く、中学生時のみ運動経験ありに比べて中学・高校生時とも継続したほうが高く、運動種目ではバスケットボール、ハンドボール、陸上競技跳躍等のインパクトの強い運動種目で高いことが

報告された。若年女性の体力・運動能力の著しい低下はすでに指摘されているところであり、今後は若年女性の筋量獲得に向けた具体的な取り組み等に関する研究を期待したい。

第3会場

<医療と学校保健>

座長 藤原 寛（京都府立医科大学）

3-1 生まれ月と肥満の頻度との関連

（井上文夫 他）

生まれ月の違いは体格差をはじめ、学力や運動能力だけでなくアレルギー疾患や虚血性心疾患の発症頻度、BMIやウエスト周囲径など肥満関連指数との関連性が報告されていることから、小学生から大学生を対象に、体格差と生活習慣病に関連する肥満の頻度との関連性を検討し報告された。小・中学生では、4月から6月の春生まれ群は身長や体重などの体格に有意な差を認めしたが、高校、大学と加齢にともない体格は生まれ月や季節間による差を認めなくなる。しかし、BMIや肥満度など肥満関連指数は、すべての年代で生まれ月や季節間で有意な差は見られないという結果であった。最近では、母親の体格や胎児期の栄養状態と出生時体重が関連し、思春期以降に肥満を呈するDoHAD仮説が注目されている。わが国の出産月は7月が最も多く、育てやすい時期に出産する傾向にあり、養育環境が出生後の成長や肥満発症に影響していると推測できる。また、第1子や長女に肥満傾向児が見られることから、生まれ月と出生時体重や兄弟姉妹との比較も興味ある内容である。一方、本研究の裏返しとして、肥満や血圧高値など生活習慣病の発症リスクを有する者の生まれ月別の頻度を比較検討することも有用な研究と考えられ、今後の研究の継続を期待したい。

3-2 高校生の薬物に関する実態と一考察

（十川真由美 他）

高校生の薬物乱用防止教育の一助をするため、高校生を対象に薬物に関する知識や医薬品の使用実態など、薬物乱用に関する高校生の意識や実態等に関する質問紙調査を行った結果が報告

された。医薬品の使用に関しては、保護者に相談して使用するが最も多かったが、用法・用量に関する説明書はほとんど読まない傾向にあった。

薬物の使用・所持には否定的で、中毒や犯罪に巻き込まれるイメージを持っている生徒が多かったが、実際に薬物使用を勧誘された生徒もあり、薬物が身近に存在していることを危惧する報告であった。最近の中学校の保健学習では、有害物質、急性及び慢性影響、社会への悪影響などが強調され、高校では、中学校の内容を発展させ、健康への影響と個人への働きかけや社会環境への対策の必要性が取り上げられている。一方、メディア報道では、使用者の社会復帰が議論されることも多く、保健学習で教材として取り上げられることもあるが、薬物乱用防止教育の目標は、文字通り防止教育であり、保健学習では「開始させない」ことが根幹になければならない。今後、薬物乱用防止教育は、喫煙、飲酒防止教育と相互に関連させながら、心身への影響や心理社会的な要因を生徒が共有できる「開始させない」教材開発を目指した研究を期待している。

3-3 取り消し

<育児と教育>

座長 森岡郁晴 (和歌山県立医科大学)

3-4 子どもに対するタッチについての母親の思いータッチケア講習に参加した母親の感想からー (小島賢子 他)

幼児を持つ母親がタッチによる接触方法を体験した29名にアンケート調査に行い、その感想を分析した結果、【タッチケアの効果】【体験的効果】【タッチケアの受け入れ】の3つのカテゴリーが抽出されたとの内容であった。タッチ効果の時の年齢による差、体験したタッチの方法と養護教諭が行っているタッチの方法との違いに関する質問があった。タッチの効果は大きいようなので、家族間で、あるいは児童・生徒との教師との間で実践できるように、その理解を広めていくことが大切であり、今後の研究が期待される。

3-5 看護系大学生へのアクティブ・ラーニング実施による効果の検討ー学校保健論におけるLTD(Learning Through Discussion)学習の試みー

(古角好美)

小人数のグループでお互いに力をあわせ、助け合いながら学習を進めていく「協同学習」を基盤にしたLTD学習を、大学生の学校保健論の科目で導入し、その効果を59名で確認したところ、討論のスキルは向上するが、コミュニケーションの不安感が高まることが示唆されたとの内容であった。各課題に対して行っている予習の時間、教員の評価方法やその視点に関する質問があった。グループ内での相談や協力が必要なことから、今後グループ編成の工夫やその効果などを検討していくことが必要であろう。

<精神保健>

座長 大川尚子 (関西福祉科学大学)

3-6 取り消し

3-7 犯罪者を親にもつ子どもへの支援は何が必要か (松村歌子)

犯罪者、特に受刑者を親にもつ子どもにはどのような困難があり、どのような支援が必要か、具体的には、子どもの権利(知る権利やプライバシーの保護の問題)、養育環境、教育環境、子どもの心身への影響について検討された。親が事情聴取や逮捕されるときや裁判手続などに、子どもを巻き込まないような環境整備や、子どもが地域や学校に居づらくならないような環境整備、子どもの心理的ケアが重要であると報告された。今後、さらに学校や地域の中で実施できる具体的な環境整備や心理的ケアについて検討されることを期待する。

3-8 中国広州の日本人学校における生徒のストレス状態 (川村小千代 他)

日本人学校におけるメンタルヘルスに関する調査結果を報告された。メンタルヘルスでは、ストレスによる症状で無力感において男子の方が高かったが、有意差を認めるほどではなかった。ストレス要因では友人において男子の方が女子よ

り有意に高かった。ソーシャルサポートでは、いずれの項目も男女間に有意差が見られなかった。生活習慣も同時に調査され、自分専用の携帯電話をもっている者は男女差がなく、日本の中学生の携帯保持率と同様であった。今後、他の項目も日本の中学生と比較され、ストレス状態との関連を検討されることを期待する。

3-9 中国広州の日本人学校における保護者の保健医療の状況（森岡郁晴 他）

日本人学校で中学生を対象に健康調査を行った際に、保護者に保健医療の状況について調査された。養護教諭が保健医療情報の入手先や保健医療の教育・指導の担当者として挙げられたことは、学校における健康管理が積極的に行われているためと考えられる。子どもの問題への対応としては、歯科医師、ワクチン接種、市販の薬は十分対応できないことから、日本で歯の治療やワクチン接種を済ませておくことや常備薬や既往症の薬を準備することが大切である。今後、インターネットなどを活用した医療相談ができるシステムの構築が望まれると報告された。

3. 会長講演報告

「てんかんを有する児童・生徒の生活指導」

学会長 高野知行（滋賀医大小児科学講座）

座長 小西真（滋賀県医師会副会長）

「てんかんを有する児童・生徒の生活指導」というテーマで高野学会長の講演をお聞きしました。日本のてんかんの患者数は約100万人（100人に1人）と推定されるとの事で、500人の学校では5人程度の子供が罹患している計算になります。決して少ない疾患ではありません。そういったことを踏まえ先生はてんかんの発作症状、生活指導のガイドライン、学校での対応と座薬使用、てんかんの原因と治療について非常に分かりやすくご講演頂きました。

紙面の関係で詳細は書けませんが、てんかんの発作には部分発作と全般発作があり、それぞれの発作についての症状等の詳細を述べて頂きました。また学校生活における発作の型と頻度による生活指導の目安、運動活動の指導の目安

も示して戴きましたが、これは学校現場の先生にとって非常に役に立つ提示であったと思います。そして発作を起こした時にやってはならないこととして、口の中にもものを入れないこと、発作直後の意識がぼんやりしている時に水や薬を飲ませてはいけないこと、体をゆすったり、押さえつけたり、大声で名前を呼ぶなどの刺激を与えないことなどを述べられました。さらに救急車を呼ぶ場合の目安、学校におけるてんかん発作時の座薬の使用は4つの条件（文科省の通知を確認してください）を満たせば医師法違反にはならないという文科省からの通知を紹介されました。先生はてんかんを持つ子供たちの治療の目標は、発作の抑制のみならず、家庭や学校におけるQOLを高めることにあると述べられています。

4. シンポジウム報告

「教室で過ごしにくい生徒たち～その背景と支援～」

座長：澤井ちひろ（滋賀医科大学小児発達支援学講座）、大平雅子（滋賀大学教育学部）

(1) 保健室の現状と養護教諭のアセスメントー養護教諭の職務等に関する調査結果からー

松崎典子（大津市立粟津中学校）

平成25年～26年にかけて、滋賀県養護教諭研究会は「養護教諭の職務」の現状と課題の明確化を図るために、質問紙調査を実施した。その調査結果を明示されながら、滋賀県の学校保健室の実態について、更には、勤務校である粟津中学校の保健室利用状況の実態について、お話しいただいた。また、養護教諭の立場から、教室で過ごしにくい生徒達へのアセスメント方法や支援の方法についての具体例を呈示していただき、学校現場の実態を詳しく説明していただいた。

(2) 子ども発達相談センターからみた現状とアセスメント

龍田直子（大津市健康保険部保健所 子ども発達相談センター）

「教室で過ごしにくいこと」の心理社会的な背景として、

1. 愛着の問題（親子の相互作用）
2. 発達
3. 精神症状やそれに関連する身体症状
4. 外的要因（いじめ、虐待等の外傷体験のみならず、聴覚過敏、学習障害、二次性徴など）

以上の4つの要因の関与が考えられることを踏まえた上で、アセスメントをすることの必要性についてお話しいただいた。また、支援を行う際には、決して「原因探し」や「問題指摘」に留まることのないように、あくまでも対象者が主語となるような計画（目標）の設定が必要であることを語られた。

(3) 小児発達外来からみた現状とアセスメント 阪上由子（滋賀医科大学小児発達支援学講座）

小児科発達外来からみた現状とアセスメントと題し、受診理由に「不登校」「行きしぶり」「別室登校」「時間外登校」と記載された事例をまとめていただいた。神経発達症は生物学的素因からなる疾患群であるが、心理社会的要因の関与は大きい。前思春期以降は睡眠障害や気分変動、心身症状の合併が増え、心理教育や薬物療法に加え、精神科との連携が有用であった。不登校は半年以内の受診にて多くが再登校していたが、自閉症を伴う場合の不登校は長引く傾向にあった。豊富な臨床経験をもとに神経発達症の包括的な話題を提供いただいた。

(4) “生まれつき”なのか“病気”なのか～そしてどう治すのか～

稲垣貴彦（滋賀県立精神医療センター）

“生まれつき”なのか“病気”なのか～そしてどう治すのかと題して、不登校における精神疾患への気づきと治療について講演いただいた。不登校生徒120人の自験例で、発達障害そのものが不登校の直接の原因と考えられたものは2%に過ぎず、多くは気分障害、不安障害、統合失調症など精神疾患が主因であった。全身倦怠感、無気力、対人能力の低下など日常生活の不調から内因性精神病を読み解くことの重要性を示された。また本人への認知行動療法、家族への対人関係療法、学校での動機づけ面接について、わ

かりやすく説明いただいた。

5. 平成28年度近畿学校保健学会奨励賞

選考委員会による審査の結果、次の者が平成28年度近畿学校保健学会奨励賞として採択された。

涂 静怡（滋賀大学教育学部）

演題：幼児における睡眠と生理指標及び唾液バイオマーカーとの関連性
(抄録はP.10に掲載)

6. 学会印象記

播磨谷澄子（大津市立雄琴小学校）

梅雨のまっただ中、参加してくださる皆様の足元が気になり、お天気を心配していましたが、なんとか1日降らずにすみほっとしました。

午前は、運営委員の一人として、受付業務をしていたため、私の所属する自主勉強会（研究会）の仲間の発表を聞くのみでした。この会は長年、故林 正先生（滋賀大学名誉教授）のご指導を仰ぎながら養護教諭有志が勉強を続けてきました。勉強会では、時に厳しく、時にやさしく（わたしたちのレベルに合わせて）ご指導してくださいました。研究の指導以外にも、学会の歴史、学会で発表することの大切さを力説され、学会に対する先生の深くて熱い思いは、身をもって「学び続けるけることの大切さ」を示してくださいました。

午後からの高野学会長のご講演「てんかんを有する児童・生徒の生活指導」は、学生時代の興味ある講義のようにわくわくした気持ちで聞くことができました。もっと知りたい、学びたいという知的好奇心を刺激し、時間が許せばより深くお話を伺いたいと思いました。

シンポジウム「教室で過ごしにくい児童・生徒たち～その背景と支援」に登壇された4人の先生方のお話は、それぞれの立場と経験に基づいたご発表ゆえ、たいへん説得力がありました。この課題は今日の学校現場でも大きなウェイトを占め、日々取り組みが求められています。残り少ない現職の日々ですが、今後の保健室や学校での対応に生かしていきたいと思えます。

学会終了後の懇親会では、参加された先生方により詳しいお話をすることができてこれも有意義でした。

近畿各府県からご参加いただいた皆様方、ほんとうにありがとうございました。

涂 静怡（滋賀大学大学院）

梅雨のうち、紫陽花が大輪の花を咲かせる頃、第63回近畿学校保健学会が滋賀医科大学で開催されました。初めての参加にもかかわらず、学会印象記を書く機会をいただき、大変光栄に思っております。この場を借りて、近畿学校保健学会参加の印象を書かせていただきます。

このたびは、私共の演題を第63回近畿学校保健学会奨励賞に選出いただき、誠にありがとうございました。今後も今回の受賞を励みにより一層精進していきたいと思っております。

今回の学会には、学部生や大学院生から学校現場の先生、医師まで多くの方々が出席しており、学校保健に関する幅広い研究成果の発表と熱心な討議が行われていました。午前中の研究発表では、多岐にわたる分野の研究発表や様々な視点からの意見を伺うことができ、貴重な機会となりました。また、午後のシンポジウムでは、保健室で過ごす子どもたちや教室で過ごしにくい子どもたちについてのお話を詳しく伺うことができたことが、非常に印象に残っております。日頃、大学院で勉強をしているだけでは学ぶことの出来ない学校現場の生の声が非常に勉強になりました。

最後になりましたが、最後に、このような機会を与えてくださった第63回近畿学校保健学会会長 高野知行先生に心よりお礼申し上げます。

安孫子恵子（滋賀県薬剤師会）

前日まで雨が降り続き、当日も朝から梅雨空のもと早朝より高野知行学会長をはじめとした運営スタッフが集合しました。この1年間、3回の運営委員会を開催し、業務内容・進行等協議し当日を迎えました。（私は途中から運営委員会に参加させていただきました）受付では、事前申し

込みの有無、学会加入の有無、会費納入などブースは分けてありましたが、一時に参加者が来られると対応が大変だったようですが、さすがベテランの先生方、問題なく処理されたようでした。

今回は、「学校現場における発達障害を有する児童・生徒の問題」に焦点が当てられ、会長講演、シンポジウムでは、子どもの精神・神経発達の様々な状態像、また多岐にわたる対応の難しさ等専門的なお話を私、薬剤師として興味深く拝聴でき今後の学校保健へ関わる一助となればと思いました。

一般演題発表では、涂静怡氏が学会奨励賞を受けられるなど若手の研究者の活躍が見え、頼もしい限りです。

今回の学会が盛会裏に終了したことは、ひとえに滋賀医科大学高野知行学会長、副会長藤居正博先生、播磨谷澄子先生、事務局長小児科学講座 澤井俊宏先生、牛場仁美様並びに運営委員の先生方のご尽力によるものと思っております。この学会が次年度和歌山で開催され益々発展されることを祈念いたします。

平成28年度近畿学校保健学会奨励賞

幼児における睡眠と生理指標及び唾液バイオマーカーとの関連性

増田翔太¹⁾, ○涂静怡²⁾, 大平雅子²⁾

1) 米原市立河南中学校 2) 滋賀大学教育学部

キーワード 幼児, 睡眠, 心拍数, 唾液バイオマーカー

【目的】

現在、幼児の客観的な睡眠評価には睡眠ポリグラフ検査（PSG 検査）が用いられている。しかし、PSG 検査は、専門の施設に入院して脳波を終夜測定するといった大がかりなものであり、幼児には身体的にも精神的にも大きく負担がかかる検査である。そこで、本研究では、幼児を対象として生理指標となり得るシート型体動計と活動量計を用いて、日中活動量が睡眠に及ぼす影響について検討した。また、同時に生化学指標になり得る唾液バイオマーカーを用いて、日中に仮眠（昼寝）の習慣がある幼児において、睡眠状態や健康状態が起床後のホルモンに及ぼす影響について検討した。

【方法】

1. 被験者

A 保育園に通園する幼児を対象とし、保護者から承諾を得られた2~4歳の男女15名（男子5名、女子10名、平均年齢 3.40 ± 0.63 歳）を被験者とした。なお、本研究は事前に滋賀大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

2. 調査内容

(1) 心理指標：被験者の睡眠習慣・生活習慣を調べるために質問紙調査を行った。また、保護者を対象に睡眠習慣や子育てについての質問紙調査を行った。

(2) 活動量：活動量計を用いて、日中の活動量（歩数・活動量）と睡眠状態を記録した。なお、活動量計は24時間（入浴時以外）装着させた。

(3) 睡眠中の心拍数、呼吸数及び体動：シート型式体動計を用いて、睡眠中の心拍数、呼吸数、体動を連続測定し、記録した。調査期間中シート型のセンサを布団やベッド等の寝具の下に設置してもらい、自宅にて測定を行った。

(4) 唾液バイオマーカー：心身の相互作用で生体内に分泌される生化学物質をバイオマーカーと呼ぶ。本実験では唾液を用いて、バイオマーカーの定量分析を行った。解析した物質はコルチゾールとデヒドロエピアンドロステロン（DHEA）である。コルチゾールは、睡眠の質を客観的に評価

する可能性があることが報告されている。また、DHEA は起床直後の反応性と睡眠の質に関連があることが明らかになっている。

【結果・考察】

睡眠中の心拍数は日中の活動量に関係なく、睡眠時間の経過に伴い徐々に減少した。しかし、日中の活動量が高い幼児では起床前に心拍数が増加する傾向が認められた。一方で、活動量が低い幼児では起床時刻が近づいても心拍数に大きな変動は認められなかった。さらに、被験者を日中の活動量の差で2群に分類すると、日中の活動量が高い群において起床前に心拍数が上昇する傾向が認められた ($p < 0.05$)。成人を対象にした研究において、覚醒時間の数分前に心拍数が予期的上昇を示した後、覚醒すると目覚めの気分が良いことが報告されている。したがって、幼児においては、日中の十分な活動量確保が起床前の心拍数上昇を惹起しているのかもしれない。

唾液バイオマーカーにおいては、夜寝後のコルチゾール濃度が起床直後から起床30分後にかけて増加する傾向がみられた ($p = 0.06$)。一方で、起床時 DHEA 反応の濃度には有意な差は認められなかった。しかしながら、日中の活動量が高い幼児では、夜寝後、昼寝後どちらにおいても、活動量の低い幼児よりも起床時 DHEA 反応の濃度が高い値を示した（夜寝 - 起床15分後： $p = 0.07$ 昼寝 - 起床15分後： $p = 0.09$ ）。起床時の DHEA 濃度が高いと睡眠の効率が良いという先行研究の結果をふまえると、日中の活動量が高い幼児では睡眠効率が高くなる可能性が示唆された。

【結論】

日中の十分な活動量の確保により、睡眠効率が高まり、質の良い睡眠が確保できる。その結果、起床前に覚醒に向けて交感神経が徐々に高まり、気分の良い目覚めが惹起される。本研究の結果から、この一連の流れにより、「よく眠れた」という実感が得られるのではないかと考えられる。一般的に「よく動いたらよく眠れる」と知られているが、本研究の結果は幼児においてもこの通説が適用される可能性を示唆することができた。

平成 28 年度近畿学校保健学会 評議員会・総会 報告

日時：平成 28 年 6 月 25 日（土曜日）
13：00～13：50

場所：滋賀医科大学 臨床講義室 3

議題

1. 平成 27 年度事業報告
2. 平成 27 年度決算報告及び会計監査報告
3. 平成 28 年度予算案
4. 名誉会員の承認
藤本正三（大阪府学校保健会会長・近畿学校保健学会評議員）
5. 第 64 回近畿学校保健学会 開催地及び会長
次期学会開催地：和歌山
会長：内海みよ子
（和歌山県立医科大学保健看護学部教授）
6. その他

1. 平成 27 年度事業報告

- 1) 309 名（名誉会員 16 名を含む，平成 28 年 3 月 31 日現在）
- 2) 会議開催，学会通信など
 - ・幹事会
平成 27 年 5 月 16 日
近畿学校保健学会平成 26 年度会計監査
第 1 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：奈良女子大学）
平成 27 年 9 月 26 日
第 2 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：大阪教育大学）
平成 28 年 1 月 31 日
第 2 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：大阪教育大学）
 - ・常任幹事会
平成 27 年 4 月 25 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
平成 27 年 8 月 23 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）

平成 27 年 12 月 20 日

近畿学校保健学会常任幹事会開催

（於：大阪教育大学）

- ・年次学会，評議員会及び総会
平成 27 年 6 月 27 日
第 62 回近畿学校保健学会年次学会開催
会長：高橋裕子（於：奈良女子大学）
平成 27 年度評議員会及び総会開催
（於：奈良女子大学）
- ・学会奨励賞
平成 27 年 6 月 27 日
平成 27 年度近畿学校保健学会奨励賞
「経験年数の少ない小学校教員における
職務ストレスとストレス反応の関連」
遠藤 朝（尼崎市立成文小学校）
- ・研修セミナー
平成 27 年 12 月 12 日
第 4 回研修セミナー開催
「～麻薬取締の現場と教育をつなぐ～」
（於：近畿厚生局麻薬取締部神戸分室）
- ・学会通信
平成 27 年 6 月 6 日
近畿学校保健学会通信 No.141 発行
平成 27 年 10 月 16 日
近畿学校保健学会通信 No.142 発行
平成 28 年 3 月 3 日
近畿学校保健学会通信 No.143 発行
- ・選挙管理委員会
平成 27 年 9 月 26 日
第 1 回近畿学校保健学会選挙管理委員会開催
（於：大阪教育大学）
平成 28 年 1 月 31 日
第 2 回近畿学校保健学会選挙管理委員会開催
（於：関西福祉科学大学）
平成 28 年 2 月 21 日
第 3 回近畿学校保健学会選挙管理委員会開催
（於：関西福祉科学大学）

近畿学校保健学会会員数

平成28年3月31日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	2	12	25	39
京都府	4	12	28	44
大阪府	6	21	55	82
兵庫県	3	18	65	86
奈良県	1	6	14	21
和歌山県	0	11	26	37
計	16	80	213	309

	平成23年 3月31日 現在	平成24年 3月31日 現在	平成25年 3月31日 現在
会員数	315	312	287
	平成26年 3月31日 現在	平成27年 3月31日 現在	平成28年 3月31日 現在
会員数	314	294	309

名誉会員名簿（17名）

平成28年6月25日現在

年	氏名	所属
平成2年	安藤 格	大阪
平成8年	植村 良雄	滋賀
平成8年	米田 幸雄	京都
平成14年	玉井 太郎	大阪
平成15年	後藤 英二	大阪
平成16年	大山 良徳	大阪
平成16年	美崎 教正	兵庫
平成17年	近藤 文子	兵庫
平成22年	勝野 眞吾	兵庫
平成24年	小西 博喜	京都
平成24年	寺田 光世	京都
平成24年	八木 保	京都
平成26年	大矢 紀昭	滋賀
平成26年	堀内 康生	大阪
平成26年	三野 耕	大阪
平成27年	山本 公弘	奈良
平成28年	藤本 正三	大阪

2. 平成27年度決算報告及び会計監査報告

平成28年3月31日現在

【収入】

	予算額	決算額	増減額	摘要
会計収入	750,000	753,000	3,000	会費@3000円×251人
第3回研修セミナー	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
前年度繰越金	389,497	389,497	0	
合計	1,139,497	1,142,497	3,000	

【支出】

	予算額	決算額	差額	摘要
印刷費	150,000	65,310	-84,690	学会通信(No.141~143)
郵送費	90,000	92,360	2,360	学会通信発送 振込手数料等
事務費	20,000	45,885	25,885	学会通信発送掛代
人件費	80,000	71,680	-8,320	事務雇用費, 会議交通費等
会議費	20,000	26,325	6,325	常任幹事会 幹事会 (年3回)
第4回研修セミナー	5,000	4,050	-950	手土産代
役員選挙費用	100,000	85,226	-14,774	
年次学会補助金	150,000	150,000	0	滋賀・第63回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	88,560	-11,440	年間契約 (カブ作成費含む)
予備費	424,497	0	-424,497	
小計	1,139,497	629,396	-510,101	
次年度繰越金		513,101	513,101	
合計	1,139,497	1,076,999	3,000	

上記の通り相違ありません。

平成28年4月29日

監事 宮井信行 

監事 高田恵美子 

3. 平成28年度予算

【収入】			
	予算額	前年比	摘要
会計収入	750,000	0	会費@3000円×250人
第5回研修セミナー	0	0	
雑収入	0	0	
前年度繰越金	513,101	88,604	
合計	1,263,101	88,604	
【支出】			
	予算額	前年比	摘要
印刷費	100,000	-50,000	学会通信(No.144~146)
郵送費	100,000	10,000	学会通信等発送、搬入手数料等
事務費	50,000	30,000	学会通信発送封筒代、文具代等
人件費	100,000	20,000	事務雇用費、会議交通費等
会議費	30,000	10,000	常任幹事会、幹事会(年3回)
第5回研修セミナー	30,000	25,000	手土産代
役員選挙積立金	33,000	-67,000	
年次学会補助金	150,000	0	和歌山・第64回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	0	年間契約(ウェブ作成費含む)
学会奨励賞(年会費)	3,000	3,000	
予備費	567,101	142,604	
小計	1,263,101	123,604	
次年度繰越金	0	0	
合計	1,263,101	123,604	

平成28年度

第1回近畿学校保健学会幹事会議事録

日時：平成28年5月21日(土曜日)

14:00~16:00

場所：滋賀医科大学 臨床講義室1

出席者：【幹事長】白石

【常任幹事】大川、鬼頭、後和

【幹事】(滋賀)板持、高野、谷川、藤居

(京都)井上、上田、藤原

(大阪)古角

(兵庫)中村、西岡、森脇

(奈良)高田、辻井

(和歌山)武田、宮下、森岡

(計20名敬称略・順不同)

欠席者：下村、森、北口、楠本、平田、吉岡、松

永、大平、川畑、春木、笠次、高橋、松本

(計13名敬称略・順不同)

新旧合同幹事会の開催に先立ち、年次学会の会

場見学を行った。

議事に先立ち、辻井選挙管理委員長より役員選挙結果報告がなされた。また、幹事長より第3回幹事会議事録の確認がなされ、承認された。

議 題：

- 平成27年度会計報告および監査について
大川常任幹事より資料をもとに平成27年度会計報告が説明された。また、高田監事より適正に会計処理がなされていたことが報告され、承認された。
- 平成28年度予算案について
大川常任幹事より資料をもとに平成28年度予算案が説明された。中村幹事より3年に1度実施される役員選挙の支出について、積立金として毎年計上するほうが適切ではないかとの指摘があり、平成28年度予算案より毎年計上することで了承され、予算案は評議員会および総会に諮られることになった。
- 平成27年度事業報告について
後和常任幹事から資料の形式が事業ごとにまとめられたことが報告され、了承された。
- 第63回近畿学校保健学会について
高野知行学会長から学会通信No.144に掲載予定の資料をもとに詳細に説明され、了承された。特に、シンポジウムでは事前にアンケート調査を行い、学校現場での問題点等を30分間程度討論することが報告された。
- 名誉会員の推薦について
大阪地区の楠本代表幹事が欠席のため、白石幹事長より資料をもとに説明され、大阪府学校保健学会会長藤本正三先生を全会一致で名誉会員として推戴することが決まり、評議員会および総会に諮られることになった。
- 評議員会および総会の運営について
年次学会当日の13時50分~14時20分に例年通り進行することとし、司会は前回の年次学会長の高橋裕子先生(京都大学)に依頼することで、了承された。

7. 第5回セミナーについて
鬼頭常任幹事より第3回および第4回セミナーでは「薬物乱用」をテーマに実施され、好評を得たことが報告され、今後のセミナーのテーマについては従前の「研究の進め方」を含める、複数のテーマを設ける、会員の獲得につながるテーマ等の種々の意見が示され、第5回セミナーのテーマについては次回の幹事会で検討することとなった。
8. 次期年次学会（第64回近畿学校保健学会）開催地および会長について
次期学会開催地である和歌山地区の森岡代表幹事より、学会長は和歌山県立医科大学保健看護学部内海みよ子教授とする報告がなされ、了承された。なお、会場と日程については未定であることが報告された。
9. その他
特になかった。
- 報 告：
1. 学会通信 No.144号の内容について
後和常任幹事より第63回年次学会のプログラムが中心となることが報告された。
2. その他
特になかった。

第5回研修セミナー

テーマ：「子どもたちの理解と子どもたちへの関わり方～非行少年や犯罪者の特徴から考える～」

講 師：竹下 三隆 先生（元奈良少年刑務所教育専門官）

略 歴：鹿児島大学教育学部卒業後、昭和60年より播磨少年院法務教官、京都医療少年院法務教官、奈良少年刑務所教育専門官を歴任し、現在は尼崎市の発達障害の子への放課後支援事業『なないろ』スーパーバイザー、堺市と京都府のスクールカウンセラー、四条畷市のスクールアドバイザーを担当、大阪府教育委員会の『暴力をともしなわなない解決力育成プログラム』を監修されています。

要 旨：問題行動や不適応行動には本人の生き辛さや保護者の余裕の無さや必死さがあります。生き辛さには資質的な要因と環境的な要因があります。保護者の余裕の無さや必死さは子どもを追いつめます。そういった本人の生き辛さや保護者の余裕の無さや必死さが何なのか、なぜそうなるのかの理解を深めることによって子どもたちへの必要な関わりは何なのかについて考える研修です。

日 時：平成28年12月4日（日曜日）午後2時～4時

研修先：「やまと会議室」3階会議室B

〒630-8213 奈良県奈良市登大路町36番地 大和ビル
（最寄駅：近鉄奈良駅）

定 員：20名まで（先着順）

非会員の方の参加も歓迎します。参加希望の方は下記のアドレスまで「お名前、所属、連絡先（メールアドレス、お電話等）」をお送りください。

申込み先アドレス：kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp

募集期間：10月15日～11月15日

平成28～30年度幹事及び評議員（▲は幹事，△は監事）

平成28年6月25日現在

滋賀県		幹事定数 4	評議員定数 12	
▲	板持 紘子	元 滋賀医科大学		住吉 由加 滋賀県教育委員会
	大迫 芳孝	滋賀県薬剤師会	▲	高野 知行 滋賀医科大学
	大平 雅子	滋賀大学		龍田 直子 大津市発達支援センター
	木村 誠	木村歯科医院	▲	谷川 尚己 びわこ成蹊スポーツ大学
	小西 眞	小西医院		野村 康之 のむら小児科
	志村 美好	大津市立真野中学校	▲	藤居 正博 滋賀県歯科医師会

京都府		幹事定数 4	評議員定数 12	
	浅井 千恵子	花園大学		林 鐘声 京都市学校医会
	市木 美知子	京都女子大学		佐々木 貞 京都府歯科医師会
▲	井上 文夫	京都教育大学	▲	藤原 寛 京都府立医科大学
▲	上田 裕司	京都市立旭丘中学校		村上 元良 京都府中丹教育局
	江崎 和子	園田女子大学	▲	森 洋一 京都府医師会
	長村 吉朗	京都市学校医会		守谷 まさ子 京都府学校薬剤師会

大阪府		幹事定数 7	評議員定数 20	
▲	大川 尚子	関西福祉科学大学		仲田 秀臣 大阪産業大学
	鍵岡 正俊	関西女子短期大学		成山 公一 大阪産業大学
	萱村 俊哉	武庫川女子大学	△	平井 美幸 大阪教育大学
▲	楠本 久美子	四天王寺大学		藤田 大輔 大阪教育大学
	甲田 勝康	近畿大学		藤田 裕規 近畿大学
▲	古角 好美	大和大学		古川 恵美 畿央大学
▲	後和 美朝	大阪国際大学		保科 寛 大阪府学校薬剤師会
▲	白石 龍生	大阪教育大学	▲	松永 かおり 大阪市教育委員会
	高井 聰美	元 関西女子短期大学		森口 久子 森口医院
	早見(千須和)直美	大阪市立大学	▲	吉岡 隆之 大阪滋慶学園

兵庫県 幹事定数 6 評議員定数 18

五十嵐 裕子	和歌山県立医科大学	▲	中村 晴信	神戸大学
大平 曜子	兵庫大学	▲	西岡 伸紀	兵庫教育大学
岡田 雅樹	大阪人間科学大学		長谷川 ちゆ子	湊川短期大学
▲ 川畑 徹朗	神戸大学	▲	春木 敏	大阪市立大学
北口 和美	姫路大学		間瀬 知紀	京都女子大学
▲ 鬼頭 英明	法政大学		宮脇 千恵美	平安女学院大学
小池 理平	姫路市教育委員会	▲	森脇 裕美子	姫路獨協大学
中井 久純	神戸国際大学		横尾 能範	神戸大学名誉教授
永井 純子	福山平成大学		吉田 順子	明石市立人丸小学校

奈良県 幹事定数 3 評議員定数 6

▲ 笠次 良爾	奈良教育大学	▲	高田 恵美子	関西女子短期大学
北村 翰男	奈良漢方治療研究所	▲	辻井 啓之	奈良教育大学
高橋 裕子	京都大学		中谷 昭	奈良教育大学

和歌山県 幹事定数 3 評議員定数 11

内海 みよ子	和歌山県立医科大学	▲	松本 健治	鳥取大学名誉教授
笠松 隆洋	和歌山県立高等看護学院	△	宮井 信行	和歌山県立医科大学
黒田 基嗣	和歌山県立医科大学	▲	宮下 和久	和歌山県立医科大学
竹下 達也	和歌山県立医科大学	▲	森岡 郁晴	和歌山県立医科大学
永井 尚子	和歌山市保健所		吉益 光一	和歌山県立医科大学
服部 園美	和歌山県立医科大学			

編集後記

今年にはリオでオリンピック・パラリンピックが開催されました。日本選手の連日の活躍で寝不足の毎日でしたが、ドーピングに対するオリ・パラ対応の違い、ジカ熱や開催地域の治安の悪さ、開催国大統領の罷免など、競技以外が騒がしい印象が強く残りました。

さて4年後は東京で開催されます。リオの閉会式では、1964年のlegacyを受け継ぎつつ、新世紀の競技者の祭典を開催したいという想いが表れたプレゼンテーションでした。単にメダルの数ではなく、「五輪を東京で開催して良かった」と、50年先、100年先まで語り継がれるよう、我々大人が責任を持つ必要を強く感じました。

(常任幹事 笠次良爾)